草画帖

第二十帖 野菜 号

野菜の号です。
表紙の絵は豌豆の莢筆で。
台所にあった葱も筆に見えました。

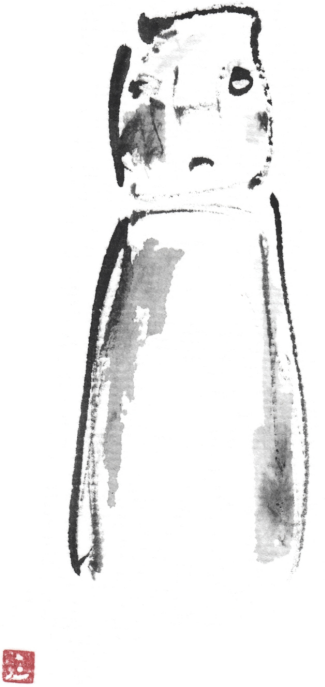
野菜と天体

新じやがの小惑星といふ風味

黒豆を並べてガリレオの星図

大根の抒情と月の地球照

大豆（葉柄）筆。
宇宙には豆粒な銀河がいっぱい。



玉葱（新芽）筆。
大根の私、蕪の私、玉葱を剥くような私…

（小さな）人参筆。
ニンジン色は一番好きな暖色。夕日の色。

里芋（小葉柄）筆。
芋の葉で風を待つ。

カボチャ

――野菜の譜・五

こどもの頃
カボチャが嫌いだった
かぼちゃんという女の子のせいではない
あの甘ったるさが今でも苦手
「南瓜や盆地は山を逃げられず」
この句も味より形
上田盆地と村山槐多の絵から出来た句
冬至には
カボチャとコルトレーンを！
夢の中の黒人女性詩人は力説したが……

サトイモ

――野菜の譜・六

こどもの頃
サトイモが嫌いだった
童謡も間違えて覚えて
「秋の夕日に照る山紅葉
　小芋薄芋数ある中に」
歌いながら
コイモも
ウスイモも
サツマイモも嫌いだと思っていた
好きな葉っぱと言われれば
まっさきに里芋の葉を挙げるのに

唐辛子筆。
人生の甘酸辛苦。辛うじて呼吸せり。

茗荷筆。
何を忘れたのかも忘れてしまった。

葱（根）筆。
葱のひげ根でくすぐりながら描くような…

薩摩芋（蔓）筆。
北条石仏が作られた頃、唐芋が琉球で栽培される。

（小さな）大根筆。
心根も大根も干して甘くせり
大根の甘さ火星の赤さよし

草話

詩画という無用の径を歩いてきたから、野菜という有用至極のものを語るのはどこか面映い。面映いだけで嫌いではない。愛用の水滴は南瓜を擬したものだし、唐辛子や葱を見ると筆にお願いしたくなる。

＊

こどもの頃は多くの野菜は嫌いだった。食わず嫌いなのではなく、毎日同じような野菜料理が食卓に載ってうんざりしたのだ。

そういうこどもが年をとって、みんなとは言わないが野菜好きになる。何を思ってか、絶筆していた時期に「野菜の譜」なる連作詩篇を書いていた。

大きな根
人が参る
草冠に無
……
農業寺の大黒さまが
野菜の名をしたためると
白菜も
玉葱も
なんだか立派になる

ぼくが書いても様にならないが、あなたなら滋味妙味が出る――と奨めたひとの直筆になる茗荷のTシャツを大変愛着している。

胡瓜

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第20号 2019年11月20日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008